

巻 頭 言

「学習開発学研究 8号」は、「学習開発学研究」の変遷もその発行母体である学習開発学講座の変遷も経験し、ずっと見続けてこられた森敏昭先生の退職記念特集号として、学習開発学とは何であったのかまた何であることを求められているのかを振りかえるため、研究論文だけではなく、これまで学習開発学講座の発展に寄与して頂いた歴代の客員教員、修了者に寄稿も求め、12本の寄稿と26本の研究論文を掲載できた。学習開発学が、如何に多くの先人や仲間を支えられていたのかを実感した号であった。

新たな一歩となるこの「学習開発学研究 9号」では、森先生の言葉を借りるなら、知識創造の学びがなされる学習環境をデザインし、そのための教育方法を科学的根拠に照らして研究・開発する学習科学に依拠する編集方針を継承しつつ共有し、さらなる発展へとつなげる使命を担わなければならない。幸いなことに、関係各位の先生方から17本の研究論文をいただくことができた。これらを見ていただければ、学習開発学の来し方行く末、あるいは、これまで残してきたこと、今の姿、そしてこれから期待されることが、少しでもわかってくるように思える。

来年度は、教職開発専攻（教職大学院）が設置され、そちらで活躍される先生もいる。一方、学習開発学専攻も、これまでの学習開発基礎専修と初等カリキュラム開発専修に特別支援教育学専修が加わった3専修から構成されるようになる。この学習開発学研究も、多様な視点から学びを科学する研究誌として新たな一歩を踏み出すべき時がきたのかと、身が引き締まる思いがする。

講座を担う我々としては、これを機会として、今後も学びにかかわる理論と実践を往還させる場としての学習開発学研究をよりよいものとしていきたい。

この研究紀要や編集主体の学習開発学講座の発展には、多くの方々のご指導が必要である。今後も、広くご意見、ご批判を賜れば幸いである。

平成 28 年 3 月

広島大学大学院教育学研究科
学習開発学講座主任
編集委員長 井上 弥